

「運命」

天
月
火
馬
人

【あらすじ】

死刑囚の谷沢は事件の真相を語り始める。
谷沢は能力者で『人の不幸な最後』の映像が見えたが、引き籠る人生を貫いていた。
しかし愛する陽子を救う為に、能力覚醒の道を必死で探す。
やがて異様な映像は、町全体に広がり始める。
谷沢はなんとか原因を突き止め、陽子を救う為に罪を犯したのだった。

【特記事項（概要、アピールポイント等）】

不幸な能力者の切ない恋、深まる謎。意外な結末。
短編ながらも楽しめると思います。

【本編の文字数】

5077文字。

【人物表】（名前・年齢・職業・性格・主人公との関係性）

谷沢誠司。30才。能力者。陰気。

相田陽子。18才。陽気な女子高生。谷沢が恋している。

林田紀夫。42才。谷沢の真実を聞き届ける記者。

コンビニの客。30代の主婦など。

看守。40代。

○田舎（朝）

雪景色。山の頂上に刑務所が見える、

○刑務所・面会室・外（朝）

扉の前に看守と林田紀夫（42）、ボサボサの髪、しわくちゃのコート。

看守、扉を開けてやる。

看守「こちらです……」

林田「どもども！」

○刑務所・面会室・中（朝）

林田、入って来る。ガラスの向こうに、谷沢誠司（30）。清潔感がある、坊

主。立って、お辞儀して、また座る。

林田、会釈すると、谷沢を見て驚く。

林田「死刑囚だと聞いて覚悟して来たんです

が……いやあ、虫も殺せない様な……」

谷沢「ハハ、よく言われます」

林田、座ると、レコーダーを横に置く。

林田「谷沢さん、早速であいすみません。ハ

イジャック殺人事件の……真実が聞けると聞いて、編集長の許可も待たずに飛んで来たんですが！」

谷沢、少しためらう。

谷沢「罪を逃れる為の作り話と思うなら、それでも構いませんが……でも、今から話す事は全て真実なんです。僕はただ、死刑執行前に、全てを誰かに話しておきたかった……」

林田「（顎を撫でながら）なるほど……」

林田、前屈みになる。

林田「では！」

林田、レコーダーのスイッチを押す。

谷沢、うつむくと、ゆっくり話し始める。

○田舎町（朝）

谷沢N「あれは……五年前程の事でした……山や田んぼばかり。小さな商店街の中にコンビニ。」

○コンビニ・中（朝）

谷沢（25）、前髪は目を隠す位。黙々と品出し。

谷沢N「僕は昔から、出る杭は打たれる、の精神で、なるべく社会から身を離して、特に夢も持たずに生きて来ました」

谷沢、うつむいて黙々とレジをこなす。

谷沢N「ですが、そんな思いとは裏腹に、実は僕には、幼い頃からある特殊能力があったのです」

谷沢（小声）千五百円になります……」

谷沢、客Aの手に少し触れる。

谷沢、電撃を受けた様にビクン。

急に、客Aの顔が、ブクブクと水ぶくれなり、ボロボロと剥げ出し、中の真皮が見えてくる。

谷沢「う、うわあっ！」

谷沢、頭を抱えて、その場に座りこむ。

客A「ちよっと！ あなた大丈夫？」

客 A の顔はなんともない。

谷沢 「い、いえ！」

谷沢 、ヨロヨロと立ち上がり、お金を受け取る。

谷沢 「あ、ありがとうございました……」

客 A 、怪訝な表情で去って行く。

谷沢 N 「実は僕は、本当にたまにですが、触れた相手の情報が映像で見えてしまうのです。ですが一つだけ条件がありました」

○谷沢 のアパート（夕）

谷沢 の部屋に灯り。

○谷沢 のアパート・部屋（夕）

谷沢 、夕飯を食べながら TV。

谷沢 、急に手が止まる。

ニュースに客 A の顔。火事で焼死。

谷沢 N 「それは、見えるのはいつも……不幸な死に方をした未来だけ、なのです」

谷沢 、リモコンでアニメに変える。

谷沢「笑いながらまた夕飯を食べる。
谷沢N「その未来はいつ来るのか、原因は何
なのか？なぜ僕なのか？それらは一切
わかりません。ただ見えるのです。相手の
恐怖に満ちた最後の顔が……」

○コンビニ・中（朝）

谷沢「黙々と品卸し。」

谷沢N「ですがもちろん、僕はそんな人達を
救う事等はせず、相変わらず毎日をひっそ
りと生きていました」

谷沢「うつむいて黙々とレジをこなす。

谷沢「しかし、そんなある日……」

自動ドアが開く。

谷沢「（小声）いらっしや……」

相田陽子（18）、黒髪の美少女、学
校の制服姿。入って来る。

谷沢「陽子に見とれている。」

陽子「ふいに振り返り、谷沢と目が合
う。谷沢「慌てて目を逸らす。」

陽子、少し微笑むと、店内をまわる。
谷沢、レジ打ちしながら陽子を何度も
チラ見。
谷沢N「彼女はそれから、決まった時間にコ
ンビニに来る様になり、僕はコッソリそれ
に勤務時間を合わせる様になりました。で
すがそこまでで精一杯。こんな僕が告白な
どする訳がありません」

○路地（朝）

谷沢「ゴミ出し行ってきまゝす」

谷沢、コンビニから出て来る。

陰から、急に人影が飛び出す。

谷沢「（身構える）な、何？！」

陽子「お兄さん、いつもあたしの事……見て
るよね！」

谷沢「え！あ、あの！」

谷沢、慌てて辺りをキョロキョロ。

陽子「大丈夫、怖い彼氏とか連れて来てない
から」

陽子、手を差し出し、待つ。

谷沢「は？」

陽子「あたし、相田陽子。ピッチピチのJk

だよ！」

谷沢「は？」

陽子「だから、OKって事よ、付き合っ
てあげる！お兄さん、いつものしよ
げてて、叱られたワンちゃんみたい
で可愛いんだもん
！」

谷沢「え！あ！そ、その、あの……」

谷沢、思わず息をのんで、そろそろ
と手を出す。

○（回想）コンビニ・中（朝）

客Aの顔がドロドロ解けていく。

○元の路地（朝）

谷沢「ひっ！」

谷沢、慌てて手を引っ込める。

陽子「……振られたの、あたし初めてだよ」

谷沢「い、嫌！　あの！　こ、これには深い
訳が……」

陽子「何よ、いつもチラ見してたクセに」

谷沢「あ、あれは、偶然の重なりで……」

陽子「偶然？！　あれが？　ヤバ、お兄さん、
面白い！」

陽子、笑いながら、跳ねるように去っ
て行く。

○コンビニ・外（夕）

谷沢、疲れた表情で出て行く。

谷沢「お疲れ様、お先に失礼します」

谷沢が歩いていると、急に陽子が飛び
出して来る。

陽子「あら、お兄さん！　偶然だなあ、エ
へへへ」

谷沢「（うつむいて、赤面）……」

○路地（夕）

谷沢、陽子と並んで歩いている。

谷沢、常にモジモジしている。

陽子「お兄さんは、どんな女の子が好きなの？」

谷沢「あ！　ぼ、僕は……彼女とか、作る気は全然……」

陽子「大人しそうな顔して……意外にいじわるなんだね……」

谷沢「え？　いや！　べ、別にそういう意味じゃ……」

陽子、谷沢にすり寄って来る。

陽子「ファミレス行こ。お家に帰っても、いつもパパとママがケンカしてて、つまんないんだあ……」

陽子、谷沢の手を握ろうとして来る。

谷沢「ちよっ、やめっ……」

谷沢、慌てて陽子の手を避ける。

陽子、急に立ち止まる。

陽子「もういい！」

陽子、後へ走り出す。

谷沢「あっ！　だから訳があるんだってば！

ちよっ、待ってっ！」

谷沢、慌てて陽子の手を掴む。

谷沢、電撃を受けた様にビクン。
振り向いた陽子。その可愛い顔が、まるで重機に押しつぶされた様にメリメリとひしゃげていく。

谷沢「う、うわあああああ！」

谷沢、よろけて後に転ぶ。

陽子「どっ、どうしたの？！」

陽子、手を差し出す。その顔は戻っている。
谷沢、全身が勝手に震えながら立つ。

陽子「お兄：：さん？」

谷沢、急に陽子に背を向け走り出す。

谷沢「嘘だ！　　そんなの嘘だあ！」

○図書館・中

谷沢、机で、横に厚い本を数冊重ねて、
熱心に本を読んでいる。

谷沢N「僕の薄暗い人生に差し込んだ、たっ

た一つの光、陽子。僕はそんな陽子を救ってあげたい。こうして、こんな僕が生まれて初めて、誰かの為に奮い立ったのです。そして僕は、昼も夜も、自分の能力について勉強しました」

○谷沢のアパート（夜）

谷沢、必死でスマホをいじっている。

谷沢 N 「どうやら僕的能力はサイコメトリイ
と
言うらしいです。ですが、あの出来事が
いつ来るのか？なぜ起こるか？それら
を探る能力を覚醒させるには：：」

谷沢、机にうつぶせで、スマホ片手に
寝落ち。

谷沢 N 「今の僕では：：まだ無理な様でした
：：」

○コンビニ・中（朝）

谷沢、倉庫で在庫確認。

谷沢 N 「あれから陽子は来なくなりました。

ゴメンの一言も言えないまま……」

谷沢、うつむいて黙々とレジをこなす。

客Bが先頭、次に客C、客D。

谷沢N「ですがそれから、信じられない現象が始まったのです」

谷沢「（小声）ありがとうございます……」

客B、上半身がひしゃげていく。

谷沢「ひっ！」

客C、客Dもそれぞれにひしゃげていく。

谷沢、瞬きを一つすると、何事も無かった様に消える。谷沢、額に汗が流れる。

谷沢N「僕は近づいただけで僕は映像が見える様になっており、そして、このおぞましい現象は、一日だけでも数件、一週間になると数十件と増えていきました……まるで呪いだ」と恐怖に震え上がりました。この田舎町で、一体何が起きているのだろうか？」

○谷沢のアパート・中（夜）

谷沢、地図を広げて、マジックで点を打つ。

谷沢 N 「僕は、あの映像を見ると、その人がどの辺りに住んでいるかを店長等から聞き出して、地図上に一件ずつ、点を打っていきましました。能力の覚醒に希望が持てなくなつた今、陽子を助ける為の手がかりが、とにかく何でもいいから欲しかったのです。しかし、現実には厳しく、ただ時間だけが過ぎていきました」

谷沢 「地図を見て、大きなため息。谷沢 「ですが、一か月も過ぎた頃、点は数万件にも及び、僕の努力は、予想外の方向で：：ようやく実つたのです！」

谷沢 「こ、これは：：」
地図の上に、ジェット機の形が浮かび上がっている。それは多少の隙間がありながらも、巨大なジェット機が地面を滑って行く様子に見えた。

谷沢 「墜落するんだ……ジェット機が、この町に！」

○刑務所・面会室・中（朝）

林田 「それでハイジャックしたと？ ……：：抵

抗した機長を殺してまで？」

谷沢 「はい、その通りです。もちろん、殺人は予定外でした……」

林田 「あ、でも、映像の出来事は、いつ起こるかかわからないのでは？ 飛行機の便の特定は？」

谷沢 「あの映像が見えた人の中には、この田舎町に旅行で一瞬だけ来ていた人も数名いました。それで出来事が起こる日付と時間は特定出来ました」

林田 「ううむ、それでもねえ……ええと、薬物での逮捕歴はありませんでしたよね？」

谷沢 「だから最初に言ったでしょう、信じなくてもいい、罪逃れもする気もない。僕はただ、誰かに真実を話しておきたかったん

です」

林田、腕を組んでまだ唸っている。

谷沢「では、僕からの話は以上です。聞いて下さりありがとうございます。ごさいました……」

谷沢、立ち上がり、お辞儀をすると、林田に背を向け出て行こうとする。

林田「あ！　最後に一つ」

谷沢「（振り返る）はい？」

林田「いままで、出る杭は打たれる精神で、社会から離れて生きて来たのに……なぜ、陽子さんだけは……自分が罪を犯してまでも、救いたいと思ったのですか？」

谷沢、林田に背を向ける。

谷沢「運命の出会い……そう思ったからです」

谷沢、少し微笑むと部屋を出て行く。
林田、大きな溜息をつく、乱暴にレコーダーのスイッチを切る。

○ 刑務所・独房・中（朝）

谷沢、小さな窓から青空を見ている。

看守、扉を開け、何かを言う。
谷沢、悟り切った表情で立ち上がる。
看守に連れられ、谷沢は歩き出す。
谷沢 M 「実は、僕は見たんだ……幼い頃、あ
る朝に」

○ 刑務所・長い廊下（朝）

谷沢、看守の後を付いて歩く。

谷沢 M 「それは、大人になった僕が首を吊ら
れて死ぬ映像だった。その時、僕は悟った、
これは僕の未来なのだ……と」

谷沢、看守の後を付いて歩く。

谷沢 M 「それからの僕は、なるべく社会から
離れる様に生きて来た。あの不幸な未来が、
現実化しない様に……」

○ 刑務所・死刑執行所（朝）

看守、谷沢、入って来る。

窓の向こうの記者達が一斉に谷沢を見
つめる。

谷沢 M「すると、驚いた事に、僕がそうする度に、その映像は時折現れ、揺らぐように薄くなっていたんだ」

谷沢、窓の向こうを注意深く見回す。

陽子はいない。フツと悲し気に笑う。

谷沢、一步踏み出す。

谷沢、顔を上げると、目前に首吊り台。

谷沢「だけど、陽子に出会ってわかった。あれは僕の不幸な未来なんかじゃなかった。あれは僕の、運命の出会いを告げるものだったんだ……」

谷沢、満足そうに笑顔を浮かべると、台に向かってゆつくり歩き出す。